

2016年3月12日

基礎研春季研究交流集会(名古屋学院大学・栄サテライト)

共通セッション I 報告

基礎経済科学研究所 自由大学院

大阪第三学科(金融・流通・協同組合論学科)の歩み、
その成果と課題

高田好章(所員・大阪第三学科事務局)

☆ゼミのこれまでの経過

- ・1977年10月20日：第1回ゼミ開催
- ・2002年：開講25周年
- ・2005年11月30日：第500回ゼミ
- ・2010年 7月28日：第600回ゼミ
- ・2015年 3月25日：第700回ゼミ
- ・2016年 3月 9日：第720回ゼミ：現在

★資料:ゼミの写真



1999年9月ごろ



2004年4月



700回記念写真 2015-03-25

☆開催日

- ・月2回： 当初は、週末の土曜日
1990年ごろから、曜日
1993年ごろから、第2・4水曜日
20数年以上、月2回水曜日開催として定着

☆テキスト

- ・月前半： 現代物
- ・月後半： 古典

※基礎研夜間通信研究科の設立(1975年10月)当初からの
学科開催形態を踏襲している唯一のゼミ

★夜間通研研究科設立時の開催資料

『経済科学通信』第13号 1975年10月 より

資本論・帝国主義論講義計画			ゼミナール実施計画									
京都は水曜日・大阪は木曜日 時間は 6:30-8:20 中10分休み			2年間の努力目標と考えて下さい。 ゼミ全員の意見で進度は決定します。 土、日の時間は調整します。									
内 容	京 都	大 阪	I 技術・産業論学科	II 自治体論学科	III 金融・流通・協 同組合論学科	IV 労働・農民運動論 学科	V 社会構成体発達史 論学科					
1. 資本論序文及経済学の方法	'75.10.15	10.16	日本経済と技術及び再生産構造の解明を中心として各産業に於ける労働の社会的地位づけを明らかにする。	共同 体・国家・自治体の相互関係を日本の自治体の現状を手がかりとし、公務労働論を指針として検討する。	金融資本の支配機構のなから民主主義的統制の手がかりがどのようにして成長するかを協同組合論を中心に解明する。	日本の階級構成を基礎に生活諸条件と階級意識の発展の関係を解明し統一戦線戦術の科学的検討をおこなう。	自然と社会の要素における労働の意義を中心に歴史の創造における経済思想、個人、住民の役割を検討する。					
2. 労働日	10.22	10.23						1. 中村静治氏の業績の検討	1. 公務労働論の検討	1. 標準労働日と協同組合	1. 共産党宣言	1. 「ドイツ、イデオロギー」
3. 協業とマニファクトゥア	11. 5	11. 6						2. 資本論における技術論	2. 資本論「協業」と共同体	2. マルクスとオーエン	2. 資本論における労働と生活	2. 「経済学批判序言、序説」
4. 機械と大工業	11.19	11.20						3. アニュファクトゥアと技術	3. マルクス「ブリュネル18日」	3. エンゲルス「フランスとドイツの農民問題」	3. マルクス・エンゲルス労働組合運動論	3. 「旗が人間になるについで労働の役割」
5. 資本主義的生産関係 (本源的蓄積)	12. 3	12. 4						4. 機械と技術	4. 資本論「社会内分業と公務」	4. レーニン「協同組合論」	4. 資本論における部分労働と全体労働	4. マルクス「人口論」批判
6. 商品と貨幣	12.17	12.18						5. 史的唯物論と技術史	5. マルクス「フランスにおける内乱」	5. レーニン「さしせまる破局」	5. 大橋隆憲「日本の階級構成」	5. 市民社会論の検討
7. 貨幣の資本への転化	'76. 1. 7	1. 8						6. 社会内分業の概念	6. 商品生産と国家	6. 資本論と商業資本論	6. 「疎外」と貧困化	6. エンゲルス「起源」
8. 絶対的剰余価値の生産と相対的剰余価値の生産	1.21	1.22						7. いわゆる経営技術について	7. 島根彦氏の業績の検討	7. 資本論と利子生み資本論	7. 労働力の価値と価格	7. 宇野経済学の検討
9. 生産的労働と不生産的労働	2. 4	2. 5						8. 超過利潤と技術進歩	8. エンゲルス「状態」の検討	8. 労働者福祉論	8. 搾取の新しい形態	8. 剰余労働の歴史的形態
10. 労 賃	2.18	2.19						9. 芝田進午氏の業績の検討	9. 経済学批判体系と国家	9. 福祉労働について	9. 中間階級論の検討	9. 「剰余価値学説史と生産的労働」
11. 資本の蓄積過程	4. 7	4. 8						10. 資本主義の労賃と技術導入	10. 公務労働者の賃金問題	10. 家政学批判	10. ウェグ「労働組合運動史」	10. 労働力商品の「特殊性」をめぐる論争史
12. 帝国主義論序文及び独占の概念	4.21	4.22						11. 南克己氏の業績の検討	11. 地域における貧困化	11. カントール「協同組合論」	11. 現代貧困論	11. 貧困化をめぐる論争史
13. 銀行の新しい役割と金融資本	5.12	5.13						12. 独占と産業構造	12. 社会資本論の検討	12. マルクス「哲学の貧困」	12. 独占と労働組合	12. 独占と価値法則
14. 都市と農村、資本の輸出	5.26	5.27						13. 山田盛太郎氏の業績の検討	13. 財政と金融	13. 金融資本と流通問題	13. 貯蓄、租税、保険と労働組合	13. 信用制度とインフレーション
15. 独占団体及び列強による世界の分割	6. 9	6.10						14. 地域と産業・農業技術	14. 国家的土地所有	14. 地域福祉論	14. 農協と労働組合・農民組合	14. 経済学と土地所有
16. 帝国主義の寄生性及び腐朽化	6.23	6.24						15. 技術開発と国際カルテル	15. 財政自主権	15. ニューディールの経緯	15. フォスター「世界労働組合運動史」	15. 比較経済史の検討
17. 帝国主義の歴史的地位及び国家独占資本主義	7. 7	7. 8						16. 技術と資源	16. 現代資本主義財政論	16. 住宅問題	16. レーニン「二つの戦術」	16. 近代経済学の検討
18. 社会主義及び共産主義	7.21	7.22						17. 国産資と日本の産業	17. レーニン「さしせまる破局」	17. 厚生経済学批判	17. レーニン「農業綱領」	17. レーニン「弁証法について」
			18. 社会主義と技術・産業	18. レーニン「国家と革命」	18. 経済的民主主義・独禁政策	18. レーニン「国家論ノート」	18. レーニン「カール・マルクス」					
3・8月は合宿予定												

基礎経済科学 夜間通信大学院 カリキュラム

学科の選択

この大学院は経済学を「はたらきつつ学び」、経済政策の立案、経済の調査研究、経済学の教育などを担当しうる能力を发展させるためのものです。ですから2～5年をかけて自分の専攻する課題（例えば「福祉労働」の本質、現代の自治体とパブリック・コミュニケーション、日本の金融政策、〇〇会社における労使関係、市民社会論批判、イギリス革命と租税制度などなど）をきめ、この課題の達成に必要な古典学習、語学研究、資料の整理についての指導をうけ、論文を作成し、経済学を今後も研究し、教育する能力を形成する必要があります。

そこで、入学希望者は将来の研究課題との関係をよく考えてつぎの5つの学科から一つを選択して下さい。

専攻課題の欄には漠然とした希望でよいからかならず記入して下さい。

学科の編成

（原則として京都・大阪は全学科ゼミナールを開設）

	学科主任	助言者及指導スタッフ
1) 技術・産業論学科	林堅太郎	中村静治, 小野秀生, 坂井昭夫, 林悠起子 ほか
2) 自治体論学科	池上 淳	島 恭彦, 横田 茂, 重森 暁, 柳ヶ瀬孝三, 加藤一郎 ほか
3) 金融・流通・協同組合論学科	成瀬龍夫	野村秀和, 近藤文男, 芦田 亘, 横田 子 ほか
4) 労働・農民運動論学科	二宮厚美	向井喜典, 村田 武, 青木圭介, 湯浅良雄 ほか
5) 社会構成体発達史論学科	本多三郎	尾崎芳治, 森岡孝二, 藤岡 淳, 林 弥富 ほか

（入学希望者の専攻課題から必要が生ずれば第6学科として世界経済論を開設する予定です。）

研究教育の方法

- (1) 指導担当教員の決定：この大学院の研究教育の活動は、基礎経済科学研究所の研究教育委員会（大学教員、専門家からなる）が担当します。研究教育委員会は、本人の希望する専攻課題を参照して指導担当教員を決定します。
- (2) 指導担当教員は学科主任と協力して入学者の専攻課題の発見と発展を保障するための助言をおこない、研究教育の能力の発展とその経過を助言者および研究教育委員会に報告し、集团的

討議によって指導をおこないます。入学者は指導担当教員と相談の上、研究教育学習計画を作成し研究教育委員会に提出して下さい。

- (イ) 入学者は、大学院事務局を通じて最低月1回指導担当教員と連絡し、あるいは面談の機会をもち研究教育学習計画の進行状況を相談し討議します。
- (ロ) 入学者は入学後2年目に一篇の論文、5年後に一定量のまとまった研究成果を研究教育委員会に提出し、審査をパスすればそれぞれについて修業証書を授与します。その成果は原則として経済科学通信に公表するか、研究所の研究叢書として公刊されます。
- (ハ) 入学者は、月2回の講義、月2回のゼミナールに（古典学習と専攻別研究）出席できますが、京都、大阪以外の地域の方は小型カセット・テープの代金をお送り下されば（3時間分）内容を録音して返送します。

研究教育指導およびカリキュラムについて

この大学院における基本的な指導形態は、指導担当教員と入学者として作成する研究・教育・学習計画の立案とその遂行にあります。しかし、この遂行のための条件は、講義によって一定の専門的知識を身につけること、ゼミナールで学習成果を交流し、発言し、相互に学びあい、高めあう習慣を身につけることによってより確実に保障されます。講義やゼミナールに参加できなくても、その記録をきいておくことは学習能力の発達にとってよい刺激となります。古典学習は何回もやる必要があり、同じテキスト（例えば資本論）の講義でも新しい研究成果を反映して変化します。

☆ゼミ学科名の由来

基礎研夜間通信研究科の開講学科名から：

第一学科：技術・産業論学科

第二学科：自治体論学科

第三学科：金融・流通・協同組合論学科

第四学科：労働・農民運動論学科

第五学科：社会構成体発達史論学科

→「大阪第三学科(金融・流通・協同組合論学科)」

※「京都」と「大阪」に第三学科が開講されていたが、
いつしか「大阪」だけになった

☆ゼミ指導担当

当初から森岡孝二先生

※20年ほど前からはゼミ参加者のみで運営するようになる

☆参加者

労働者研究者が大部分：企業に働きながら、

今は多くは働き終わって学び続ける人たち

大学院生なども、時に参加される

☆テキスト

- ・古典物テキスト

『資本論』第1巻・第2巻・第3巻

※現在は、3回目目に挑戦中:第2巻20章12節を終わる

- ・その他の古典物テキスト

『経済学批判要綱』

『帝国主義論』

『金融資本論』

『金融資本論』:1977 年 11 月 3 日～1978 年 11 月 18 日
『帝国主義論』:1978 年 12 月 16 日～1979 年 4 月 28 日
『資本論』3卷:1979 年 11 月 1 日～1982 年 5 月 8 日
『帝国主義論』:1982 年 11 月 6 日～1983 年 6 月 4 日
『資本論』3卷:1983 年 12 月 3 日～1985 年 3 月 9 日
『資本論』2卷:1985 年 4 月 20 日～1987 年 3 月 14 日
『資本論』1卷:1987 年 4 月 18 日～1990 年 9 月 28 日
『金融資本論』:1990 年 11 月 16 日～1993 年 7 月 7 日
『経済学批判要綱』:1993 年 12 月 1 日～1997 年 5 月 28 日
『金融資本論』:1997 年 9 月 24 日～1999 年 11 月 24 日
『資本論』2卷:2000 年 2 月 23 日～2002 年 5 月 22 日
『資本論』3卷:2002 年 6 月 26 日～2008 年 3 月 26 日
『資本論』1卷:2008 年 4 月 23 日～2012 年 4 月 25 日
『資本論』2卷:2012 年 5 月 23 日～2016 年 2 月 24 日現在:第20章12節

- ・現代物テキスト

高田太久吉『マルクス経済学と金融化論』

※現在は、第9章を終わったところ、あと一つで終わる

- ・その前に取り上げた最近のテキスト

鶴田満彦『21世紀日本の経済と社会』

若森章孝『新自由主義・国家・フレキシキュリティの最前線』

姉齒暁『豊かさという幻想―「消費社会」批判』

D・ハーヴェイ『資本の〈謎〉世界金融恐慌と21世紀資本主義』

有井行夫『株式会社の正当性と所有理論』 など

☆ゼミの楽しみ

・個人研究発表

テキスト以外に、参加者の個人研究の発表の場

※これが後に出版物として結実していく

特に、出版を目標とする場合には、ゼミの多くの時間を割いて
個人研究発表の場とした

・合宿

当初より、1泊の合宿を適宜行い、個人研究発表の場とした。

また、出版を目標とする場合には、特に多く行った

★資料:合宿の写真



1990年3月 六甲山荘にて



1994年5月 関大高槻にて



2002年10月 関大彦根にて

・ハイキング

最近は、春・秋の気候の良い時に、京都・大阪・滋賀・奈良などをハイキングするようになった。特に歴史的に由来のある場所へ行くことが多い

★資料:ハイキングの写真

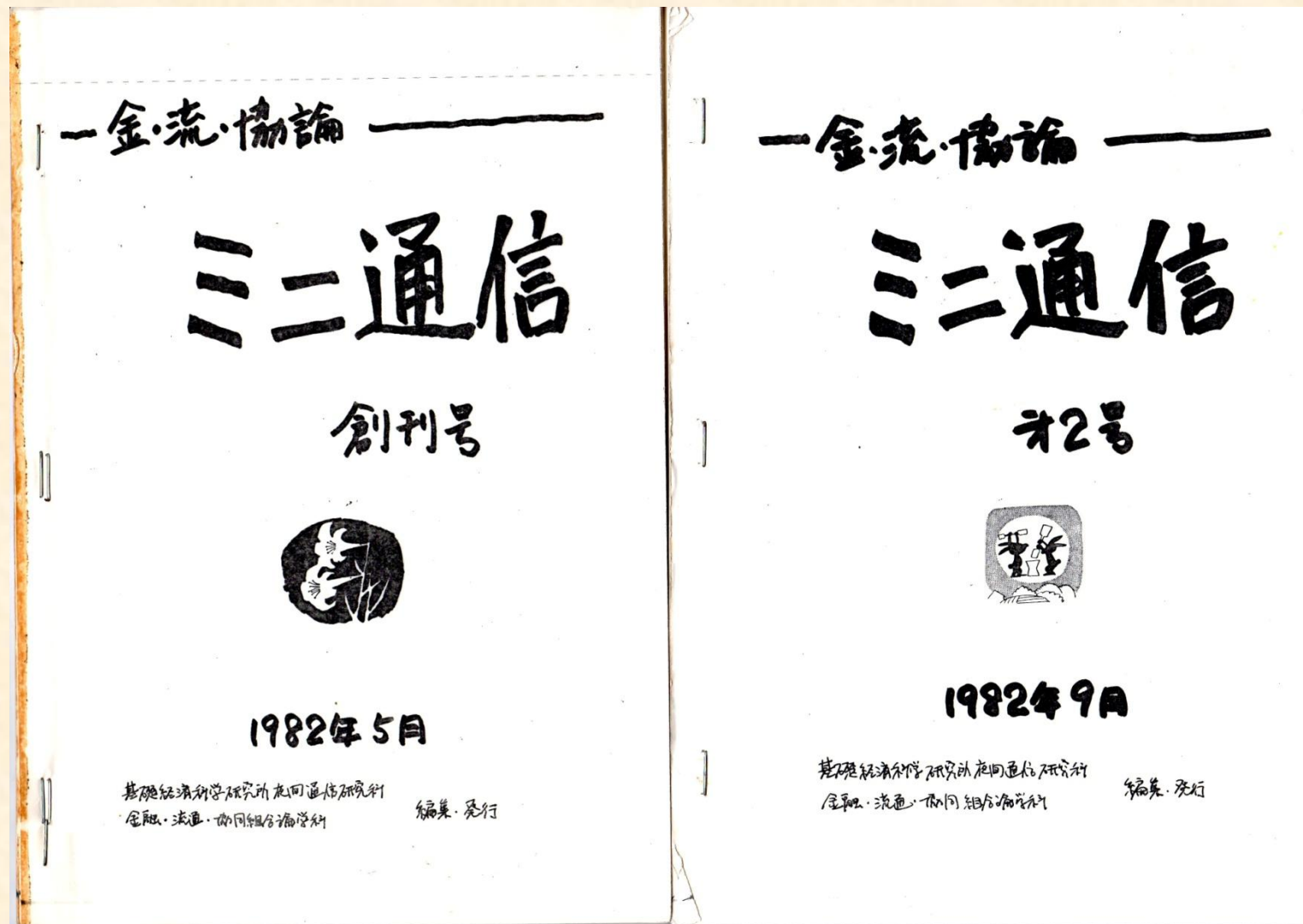


2002年4月 東山巡り



2015年11月 宇治・三室戸寺

☆ゼミの出版物 の前に、「三二通信」: 1982年5月・9月



☆ゼミの出版物： 5冊 1986年～2012年

1) 森岡孝二編『勤労者の日本経済論—構造転換と中小企業』
法律文化社 1986年



<http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/kisoken/bunken1.htm>

2) 森岡孝二編著『現代日本の企業と社会—人権ルールの確立をめざして』 法律文化社 1994年



<http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/kisoken/bunken2.htm>

3) 大阪第三学科開講25周年記念『変化のなかの企業と社会』
2003年3月 基礎経済科学研究所自由大学院大阪第三学科

変化のなかの企業と社会	
労働者の経済学を求めて一	
2007年12月	
大阪大学経済学部創立50周年記念	
大阪大学経済学部創立50周年を記念して	森 秀 一
アメリカのリーマン・ロイシグが 労働システムの変化と労働者運動 クローバリスティック・システムと 人・モノ・金の内部分配の最適化 資本化する労働者の労働時間 経済に立脚した労働企業論 「労働者（労働）者」論への序言 労働者の権利意識と労働者の 労働者の権利意識と労働者の権利意識	山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子
労働者の権利意識と労働者の権利意識 労働者の権利意識と労働者の権利意識 労働者の権利意識と労働者の権利意識 労働者の権利意識と労働者の権利意識 労働者の権利意識と労働者の権利意識 労働者の権利意識と労働者の権利意識 労働者の権利意識と労働者の権利意識 労働者の権利意識と労働者の権利意識 労働者の権利意識と労働者の権利意識 労働者の権利意識と労働者の権利意識	山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子 山 本 浩 子
大阪大学経済学部の未来	山 本 浩 子

<http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/kisoken/bunken3.html>

4) 森岡孝二編著『格差社会の構造——グローバル資本主義の断層』 桜井書店 2007年9月刊



<http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/kisoken/bunken2007.html>

5) 森岡孝二編『貧困社会ニッポンの断層』 桜井書店 2012年
4月刊



<http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/kisoken/bunken2012.html>

- ・学ぶことの目標：本を出版すること

「学びたい」・「知りたい」 から 「書きたい」へ進む

集団学習と、参加者個人の学ぶ目標が重なり合う

ゼミへの求心力と推進力の加速

各自のテーマと全体のテーマが重なり合うとき

- ・それぞれのテーマと全体のテーマ

参加者個人のテーマ：労働現場で働きながら考えことを、文字

として明らかにする：現場感覚

全体のテーマとの関連性：それぞれのテーマをゼミに討論しあ

うことで、次第に全体のテーマとの関連性が明確になる

☆なぜ、ゼミが長年続くことが出来たのか

これまで、38年5カ月、720回のゼミ開催

1) 参加者の熱意

多くの人は30年以上、20年以上参加している

第1回ゼミから参加しているのは、一人

2) ゼミ参加者が2人になっても続けること

時には、急いで会場に着くと、一人だけが待っていて、お互いに

二人ではゼミにならないなあ、と言ったことが何度かあった。

3) 事務局の役割

- ・ゼミ通信の役割: ハガキで参加者に出し続ける

最初のころはB4版封書、現在はハガキ版

★資料: ゼミ通信: 大阪第三学科からのたより

最初のころは、手書き

現在は、ハガキ版 7ポイント字

1983年
6月18日(土)

第6巻第14号
Jim局発行

大阪大学三学科 ゼミ通信

①第14回ゼミナール

出席 斎田、小野、廣地、山田
友田、奥村、森井、西田

欠席者 井上、宇佐美、荒井、小川、日本
交差点の構造 後鳥羽院
Rep. 奥村

“危機における日本資本主義の構造” (井上・宇佐美)

〈後編〉第1章 経済構造と政治構造の変化

〔分析方法〕論

「経済構造は諸種のウクラッド(経済制度)の複合体から成る」

「資本主義的経済体制では資本主義的ウクラッドが支配的ウクラッドであり、これが他のウクラッドを従属させている。」

(ex)〈日本資本主義分析〉 (ex 吸収)

資本主義的ウクラッド>半封建的ウクラッド (レーニン「発展」)

X 「融合」単一ウクラッド説 —— ex 吸収の契機見失う。

X 資本ウクラッドの一面強調説 —— 被規定面の軽視

〔分析対象〕論

「支配的ウクラッドの発展的段階・度合・様相」

「従属的ウクラッドの存在形態・存在の程度」及び「相互関係」

(ex)〈日本資本主義〉

戦前とそれからの変化 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

「発展度合」(次章) 「半封建の存在形態・程度の変化」

「①との相互関係」(本章)

1. 経済構造における半封建制の変化

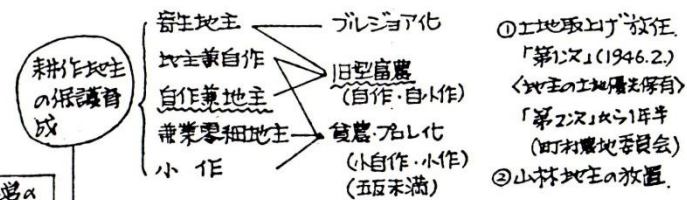
・農地改革(第2次公布1946.10から2年余)の完了

耕地面積の9割(180万町歩)の解放、残存小作地小作料金納利率引

下げ、→「地主的土地所有一般」の打撃

→「従来の経営をはなれた地主地層の没落」に代って

「経営に根柢をおいた自作兼地主層の強化」



(1) 1町歩以下小作地保有 (2) 山林放置 (3) 耕作权・土地所有権の抗拮

・耕作地主の存在形態 = 旧型富農

労働力補填 (1) 作男形態 (労働地代) (2) 共同耕作に名を借りた委託耕作 (現物地代) (3) 兼業的賃雇用 (労働地代と賃労働の混同)

・相互関係 —— 独占資本支配の補完物 (半封建的関係)

独占資本の農民収奪政策 (低米価供出・重税) [新型富農形成に圧力]

→ 農民分断 (供出割当などの行政機構末端にヤミ富農を配置)

「かくし田」「縄のび」「地力増進」

② 7月のわけじや〜③

7/5日
ゼミ

日時: 7月2日 (SAT.) 6:30PM ~ 9:00PM

場所: 秋葉/会館 1F 格闘場

報告: 経済学雑誌 No. 39 全代会

- ・斎田論文 --- Rep.
- ・鶴田論文 --- Rep. 山田
- ・中原論文 --- Rep. 太田



7/16日
ゼミ

日時: 7月16日 (SAT.) 6:30PM ~ 9:00PM

場所: 秋葉/会館 1F 格闘場

報告: 秋田大学経済学研究会

・個人報告の発表時間 --- Rep. 森井

→ 経済学雑誌の発表時間

・個人報告 --- Rep. 11部、宇田、山田

秋田大学経済学研究会 --- 7月22日 (金) ~ 24日 (日) まで!!

七三通信

5月21日(土) 教育会館 6:30~9:00 「帝國主義論」8~10章 (以降 6月18日、7月2日、7月
6月4日(土) 「危機に對する」續編序1章 16日、7月22~24日(全通)

正月早々から様々なニュースが：サウジとイラン、そしてリビア・シリア、突然の水爆実験、株価下落、国内では硝酸爆発事故で派遣2名犠牲。

12月23日のゼミは、マルクス『資本論』第2巻20章「単純再生産」の10節「資本と収入—可変資本と労賃」を高橋さんの報告で行いました。価値生産物(v+m)は生産物価値(c+v+m)より小さい。一年間に生産された商品量と作られた価値との差は、新たな存在形態で再現しただけの価値・生産物に移された価値である。一方にとつての資本が他方では収入であるという見解は部分的には正しくとも一般的には間違いである。可変資本が資本家にとつては資本として、労働者にとつては収入として二重に機能するのでなく、同じ貨幣が資本家から労働者へ移動、売り手と買い手という異なる用途をするにすぎない。 $I v + m = II c$ の交換については、Iの労働者とIIの資本家との立場を考察し、資本運動は流通運動であり、資本家は買い手・売り手・両方として現れるが、労働者は商品の買い手として現れるだけである。IIのvの転換では部門内資本家と労働者との無媒介的形態による流通であつて、I vとは異なる。可変資本は資本家の手中にある限り他の人の収入に転換することはない。収入に分解されるのは、貨幣に転化された労賃に過ぎない。労賃は可変資本の転換ではなく労働力の価値の転換である。なお報告に先立ち以下の説明があつた。7～10節ではアスミス達の誤った見解への批判等にかんがりの重複があり叙述が整理されていない、との議論が紹介され、また「収入」はすでに19章でその語源が述べられ、厳密な定義は3巻48章で行つていて、「収入」はRevenueとEinkommenがあり「所得」との訳語もある。討論では、税法では収入と所得は違うが、3巻から2巻を読むといいのでは、三位一体から読むべきとの説も。価値構成説と価値分解説は結局両方とも否定されていて、収入がカギである。貨幣を含めての再生産・回転の問題。収入の意味が資本家と労働者とは違う。労働者は奢侈品は購入せずと設定、その日暮らし。潜勢的とは可能性よりもっと必然的。出席は、小野さん、高島さん、川口さん、高橋さん、服部さん、齋藤さんと高田の7名でした。

*春季研究交流集会1日目(3月12日)の「「働・学・研」融合の理念と実践」共通セッションにおいて、大阪第三学科の48年・700回以上の活動の経験と課題を高田が報告する予定です。乞う、ご意見を

*次回の会場は南森町・働き方ASU-NET事務所：梅ヶ枝中央ビル7階

***** ゼミ日程 *****

1月13日(水)午後6時半～9時 南森町・働き方ASU-NET事務所

高田太久吉『マルクス経済学と金融化論』第7章 報告大村さん

1月27日(水)午後6時半～9時 南森町・働き方ASU-NET事務所

マルクス『資本論』第2巻第20章:単純再生産 11節 報告高橋さん

2月10日(水)午後6時半～9時 南森町・働き方ASU-NET事務所

高田太久吉『マルクス経済学と金融化論』第8・9章 報告者未定

2月24日(水)午後6時半～9時 南森町・働き方ASU-NET事務所

マルクス『資本論』第2巻20章:単純再生産 11節:続 報告者未定

その後 3/9, 3/23, 4/13, 4/27, 5/11, 5/25, 6/8 (働き方AN)

※「ゼミ通信」を書き続けることは、とても勉強になる
テキストの内容を要約する、
議論をまとめる、
論点を明確にする

- ・ゼミ通信を、基礎研の所内メーリングリストへ投稿：
ゼミは何をしているか、
基礎研所内の人々に知らせめ、
ゼミ内外での議論の門戸をいつも開いておく
- ・ホームページへの掲載：所外へも広報する

基礎研HPから第三学科のHPへ <http://kisoken.org/>

4) 古典物と現代物との融合

- ・夜間通信研究科の開催形態を踏襲してきたこと: 正解！！

それは、この形が最も学ぶときに有効であること
理論的基盤と、現代を読む力、両方が必要

- ・『資本論』全3巻読むのに、7～9年かかっているが、
何度読んでも新鮮な議論ができる

また『経済学批判要綱』(資本論草稿集)を読むことで(5年間)、
さらなる資本論理解が進んでいった

- ・現代物は、特に単著で、最近のものを選んでいる：
いろいろな論者の深い論証を知ることができる
選ぶときは、参加者で討議をして決める
- ・古典物と現代物を一緒に学んでいくことによって、
下降へ・上向へと向かう、論証の流れを
明確にすることができる

5) 現場意識を持ち込む

- ・皆は、労働現場で働き・働いてきて、現場感覚をも備えている人々によって、豊富な議論ができる
- ・他の労働現場や経済の流れを知ることができる

6) 他流試合: 他のゼミへの広がり

- ・このゼミを母艦として、基礎研内外のいろいろなゼミに参加される人々が多くいる。またこれまでもゼミから社会人大学院で学ばれた人も、再びゼミでさらなる学びを続けている

☆これからの課題

- ・1000回ゼミまで・・・
- ・皆さんとともに、歳をかさねられて・・・
- ・新たな参加者について
 - ・働いている人への、「学ぶ場」の提供
 - ・社会人大学院から、自由大学院ゼミへ
いつまでも仲間と学ぶことができる！

☆まとめ:

- ・単に勉強・学習することではなく、ゼミで自らの勉強していることを発表し、論文を執筆し、お互いの学びたい・知りたい・書きたい方向と目標を知り合うことができ、さらにそこから集団学習のこれらか目標が出てくる。
- ・さらなる集団学習と参加者との目標が近づくことで、ゼミへの求心力が高まり推進力が加速する。それがひとつのテーマにまとまってくれば、ゼミで本を出版できる体制が出来上がる。

- ・参加者自らの勉強範囲外の事をゼミで知ることができる。つまり、他の参加者の学習したことや経験を聞くこと、ある問題で議論をすることで、これまでどのような論文や文献・論争を知ることができ、また学界の現在の流れ・新たな流れを知ることが出来る。

- ・私的見解：

ゼミこそ、私の「働きつつ学ぶ」場の基盤であり、実践の場である。これまでも、これからも……